

# 枕草子の系流

## 目加田さくを

### (一)

枕草子に

雨のうちはへ降る頃、今日も降るに、御使にて、式部の丞信経参りたり。例のごと褥さし出したるを、常よりも遠くおし遣りて居たれば、「誰が料ぞ。」と言へば、笑ひて、「かかる雨にのぼり侍らば、足がたつきて、いと不憫に、きたなくなり侍りなむ。」と言へば、「など、せんぞく料にこそはならめ。」と言ふを、「これは御前に、かしこ仰せらるるにはあらず。信経が足がたの事を申さざらましかば、え宜はざらまし。」と、返す返す言ひしこそをかしかりしか。「はやう中后の宮に、多ぬたきと言ひて、名高き下仕なむありける。美濃の守にて失せにける<sup>とき</sup>時柄が、藏人なりける折に、下仕どものある所に立ち寄りて、『これやこの高名の多ぬたち。などさしも見えぬ。』と言ひけるいらへに、『それは時柄に、さも見ゆるならむ。』と言ひたりけるなむ、かた木に彫りても、さることは争でかあらむと、上達部、殿上人までも、興あることに宜ひける、又、さりけるなめ

り、けふまでかく言ひ伝ふるは。」と聞えたり。「それ又、時がらが言はせたるなめり。すべてただ、題がらなむ、文も歌もかしこき。」と言へば、「げにさもあることなり。さば、題出さむ。歌詠みたまへ。」と言ふ。「いとよき事」と言へば、「御前に、同じくは数多を仕うまつらむ。」など言ふ程に、御返し出で来ぬれば、「あな恐ろし。罷り逃ぐ。」と言ひて出でぬるを、「手も、いみじう眞字も仮字も悪しう書くを、人の笑ひなどすれば、隠してなむある。」と言ふもをかし云々<sup>(山岸徳平氏校註枕草子八七段)</sup>と言ふくだりがある。信経は、自分が歌を詠まなければならぬ羽目に陥つたゝめに、慌てゝ逃げ帰つてしまつた。その為、彼が提起した意見、即ち、清少納言の吐いた秀句に対して、その契機となつた彼の言動が、大いに重視さるべき事、それなくしては、如何に清少納言たりとて如上の秀句を吐く事は出来なかつたに相違ない、と言ふ考へ方、ば有耶無耶な解決を与へられて、結局彼の負と言ふ事になつたかの観がある。しかし、その意見の是非は暫くおき、これは面白い問題を清少納言の文芸に提起したのではないだらうか。少くとも、清少納言の文芸の性格を考へる時、それ

はキイポイントにふれてゐる様に思はれるのである。

枕草子を、その影響作品でもあり且その系流のいはゞ本流に属すると目されてゐる徒然草、並に犬枕等と比較する時、顯著な事実に気づくのである。それは、徒然草や犬枕にはなく、枕草子には随所に見られるところの、彼女の人のいゝ自慢談である。前掲信経との問答も、<sup>せんぞく</sup>氈褥(褥のこと)——洗足(せんそく)の即妙のウイットを賞められた事を語るその一つである。章段を逐つて、代表的なものを見て行つても、五段(a)……(b)『家の程身の程に合せて侍るなり。』といらふ。(c)『されど門の限りを高く造る人もありけるは。』と言へば(d)『あな恐ろし。』と驚きて『それは千定國が事にこそ侍るなれ。古き進士などに侍らずば承り知るべきにも侍らざりけり。』……(a)……(b)『ちうせい折敷に、ちうせい高杯などこそよく侍らはめ。』と申すを(c)『さてこそは、うはおそひきたらむわらはも参りよからめ。』一九段(a)……(b)年経れば齡は老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなしと言ふ事を、(c)『君をし見れば。』と書きなしたる、御覽じくらべて(d)唯この心どものゆかしかりつるぞ。』……など仰せらるるにもすすろに汗あゆる心地ぞする。年若からむ人は、はた、さもえ書くまじき事の様になどぞ覚ゆる。三二段(a)……(b)『や、や、罷りぬるもよし。』とて、打ち笑み給へるぞ目出度き……(c)『五千人の中には入らせ給はぬやうあらじ。』と聞えかけて歸りにき。六八段(a)……(b)蘭省の花の時錦帳の下と書きて『末は、如何にく。』……(c)草の庵を誰か尋ねむ……(d)……行先も必ず語り傳ふべき事なりとなむ、皆定めし……八三段(時鳥を開きにゆく條)

八五段(『第一の人にまた第一に思はれむとこそ思はめ。』八六段(a)……(b)『更にまだ見ぬ骨の様なり。』……(c)『さては扇のにはあらで、海月のなり。』八七段(信経前掲)九〇段(a)……(b)そらさむみ花にまがへて散る雪に……一五段(b)『進上餅飯一包例によりて進上如件……』……(c)みづから持てまうで来ぬ下部は、いと冷淡なりとなむ見ゆめる。』……一八段(『いと夜深く侍りける鳥の声は孟嘗君のにや。』……)一九段(『おい。此の君にこそ。』)一四三段(『急ぎける七夕かな。』)二七〇段(香炉峯の雪……)等々の多数にのぼるのである。即ち、枕草子において、自然或は人事に関する観照、にかゝる章段を除く他の章段——(主として事件を叙するもの)——は殆ど凡て、此の自慢談に類するものである。その自慢の対象として採りあげられたものは、殆ど左の例の如く、

- (a) 雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子参りて、炭櫃に火おこして……
- (b) (少納言よ。香炉峯の雪如何ならむ)と仰せらるれば
- (c) (御格子あげさせて、御簾を高くあげたれば
- (d) 笑はせ給ふ。人々もさる事は知り、歌などにさへ歌へど思ひこそ寄らざりつれ。なほこの宮の人にはさべきなめりと言ふ。
- (a)(b)(c)(d)から成る構造をとつてゐる。(a)(b)(c)(d)とは、
- (a) 予件、状態の説明
- (b) 清少納言をして、(c)をなさしめる直接の契機となつた他人の言語動作

・(a) 清少納言の言語動作：(自慢の対象たるもの)

(b) (c) が人々によつて如何に賞讃されたかの報告。清少自身の感想も附加される場合がある。

であつて、就中、(b) (c) は切つても切れない関係として提示されるのが常である。例へば、

餅餠<sup>（い）</sup>(b) — 冷淡<sup>（い）</sup>(c)。蘭省の花の時錦帳の下(b) — 草の庵を誰か尋ねん(c)。まだ見ぬ骨(b) — 海月のななり(c)

(b) にも、色々あつて、中には、何気なく言はれたもの、例へば、「まだ見ぬ骨の様ななり」とか、問題を提起した信経自身の「かかる雨にのぼり侍らば、足がたつきて云々」と褥をおしやつた、と言ふ言動もあるが、中には確に、それ自身、多分に凝つた言ひ方、かなり文芸意識を働かせたものがあるわけである。中宮の「香炉峯の雪」、行成の「餅餠」の如き、頭中將齋信の「蘭省の花の時云々」は、これによつて清少納言を試さうと言ふのであるから、その意味では一層考へを凝したものであつた事は、源中將や則光等が、「頭中將の宿居所に、少し人々しき限り、六位まで集りて……皆言ひ合せたりし事」、「ある限り、かうようしてやり給ひし」と清少納言に語つてゐるのによつて明白である。それだけ、清少納言の言動、(c) も唯何気なく提示された任意の契機(b) を擱んで、簡単な秀句を吐く場合と異つて、清少納言自身も緊張して事に當つた事は自ら記すところであり、従つて、その出来栄えが本格的に立派である。即ち、この様に、「信経が足がたの事を申さざらましかば云々」と(実はその(b) を何気なく彼は言ひ、即ち、何でも無い信経の言動を(b) にしたのは実は清少納言であり、

そこは彼女の主張はあるわけであるが、この事は暫くおき) 信経をして言はしめずにはおかなかつた何かゞ存在するのである。それは、單に、(c) を生みだす契機としての(b)、と言ふにとゞまらず、否、むしろ、(b) (c) 一体となつて一つの文芸性を要求するものなのではなからうか。事實上、「蘭省の花の時錦帳の下」は「草の庵を誰かたづねん」と連つてゐるのである。何人も知る如く、白詩は「蘆山雨夜草庵中云々」と続くのであり、それを「草の庵を云々」と即妙に翻譯して続けたのであるから。又、その事は、上掲の例の中、既に純然たる連歌として遇せられてゐるものの存在をもつても証せられるであらう。

(b) 下蔵こそ恋しかりけれ (中 宮)

(c) 時鳥たづねて聞きし声よりも (清少納言)

(b) bすこし春ある心地こそすれ (公 任)

(c) そらさむみ花にまがへて散る雪に (清少納言)

洗足

鮎梅

又、實際上、冷淡、せんぞく、の面白味は餅餠、せんぞくと連らなければ生じて来ない。「おい、この君にこそ」の秀句が秀句たりうるのは、(b) に當る、呈竹の枝をそよとさし入れる動作と連る故であつて、單獨では更に意味をなさないのである。

かう見て来る時、枕草子中、相当の分量を有し、後世その故に枕草子並に作者清少納言を有名ならしめ、印象づけてゐるところの「事件を叙する章段」の骨子をなすものは、それは、如何にも平安中期のものらしい初期連歌、或はそれに類する性格のもの、であると言ふ事が出来るのではなからうか。即ち、連歌、又はそ

と迄は未だ到達してゐないが、それと同類の (b) — の「言語動作」に連る (c) の「言語動作」—— 文芸である、と言ふ問題に、信経の素朴な文芸論的言辭は関りを有してゐたと思ふのである。そしてその事に関する限りでは、枕草子は、所謂枕草子の系流作品といはれる徒然草、犬枕等と全く異つた範疇に属するわけであつて、從來この面が等閑に附せられてゐた様に思ふのである。

## (二)

枕草子中、事件を叙するもの、を除けば、あとは、所謂「ものづくし」の章段である。それらは且て論じた様に、

(A) 山は 淵は 家は 式の章段

普通名詞 + は + 固有名詞 …… 27%

(B) めでたき物 にくきもの 式の章段

形容詞 (又は之に準ずる形容語) 物 + …… 形容詞 …… 27%

(C) 春は曙 思はむ子を 式の章段

名詞 (又は行動、状態の名詞形をとれるもの) + は …… 形容詞 …… 20%

の三形態様式をもつものであつて、枕草子の大半を占めるのである (の%は章段数)。それらの内容は、自然、人間、文化に関する観照と批判であり、枕草子の本質的な一面を代表するものである。この一面こそは、徒然草に踏襲され、その性格が止揚されて結局徒然草はその独自の文芸性を有つ事になつたのであるが、形態様

式としては、その物づくし性が稀薄になつた。即ち、(A) 式はこれを欠き、(C) 式から徒然草は出発し、物づくし性に替るに、考証性、教訓性が現れて來てゐるのである。しかし乍ら、枕草子の一面の性格を止揚してなつたその豊かな観照性批判性並に趣味性といはれるもの、故に、枕草子の系流に属する作品中随一とされてゐるのである。

次に、枕草子の系流に属する、所謂「犬枕」類は、形態様式としては、(B) 式の忠実な踏襲であると言へよう。即ち、

うれしき物。かなしき物。したひ物。いやな物。見たき物。見くるしき物。つまる物。すぐれていらぬ物。なりさうでならぬ物。なりさうもなふて成物。はなしにしまぬ物。はなしにしむ物。いらぬやうて入物。いりさうていらぬ物。こゝろわくつく物。わるかたきなる物。よいかたきなる物。身のけたちのする物。あぶなき物。おそろしき物。人にあなつらるゝ物。おもしろき物。にくき物。ありかたき忝物。はらのたつ物。きたなき物。きれいな物。いたき物。かしらのいたき物。むねのいたき物。くたひるゝ物。とめたき物。いなせたき物。きくにいやな物。といたき物。きつかひしてうれしき物。さつとすむ物。てのうたるゝ物。はつかしき物。むつかしき物。しりたき物。しりていらぬ物。さひしき物。つれ／＼なくさむる物。かたはらいたき物。あさましき物。いひにくき物。わひしけに見ゆる物。くるしけにみゆる物。うらやましき物。心もとなき物。こゝろにくき物。たのもしきもの。たのもしけなき物。大きくてよき物。ちいさくてよき物。なかうてよき物。みしかくてよき

物。しつかなる物。さわかしき物。みしりにくき物。見しりよき物。ゆたんせらるゝ物。じひなる物。しこき物。わるき内にもよき物。よき内にもわるき物。せうしなる物。かん用なる物。心よき物。したたるき物。きゝてうれしき物。めてたき物

(國語・國文・第八卷四号)  
杉浦氏翻刻犬枕による

と言つた(B)式で金巻が満されてゐる。右に掲げた全題目名を一覽して来てほゞ見當がつく事であるが、更に内容をみると、

○きつかひしてうれしき物

一わか子のかうみやう

一歸さうにしてとまる若衆

一ひとりむすめむす子たんしやう

一あやまりなきにわかしのりんき

一やふくすしにあふてやまひなをる

右の一例が端的に現してゐる如く、自然觀照に類するもの、觀照と迄行かずとも純粹自然美に関するもの、は非常に稀であり、殆ど凡てが人間生活、殊に、卑俗に類する市世の庶民生活をのみとりあげてゐる。従つて、明瞭に枕草子の系流に属する作品であり乍ら、豊かな自然美の享受、とその巧な表現、洗練された文化批判並に興味性、鋭い人生觀照に基づく枕草子の所謂平安朝的「をかし」「あはれ」の世界とは、かなり違つて來てゐるのである。それはむしろ、嘗て論じた唐の詩人李義山の雜纂の世界に近いものである。即ち、李商隱の雜纂では、必不来 不相称 羞不出 怕人知 不嫌 遲滯 不得已 相似 不和不解 惡不久 腦人 失

本体 隔墜聞語 富貴相 謾人語 酸寒 不快意 惶惶 殺風景 不忍聞 虛度 不可過 難容 意想 惡模樣 不達時宜 悶捐 人 癡頑 愚昧 時人漸顛狂 非礼枉屈 不詳 須貧 必富 有知能 教子 教女 失去就 強会 無見識 要小下要便宜 と言ふ題目の下に、物づくしをやるのであるが、これらの題目といひ、その内容と言ひ、殆ど同種の世界である。

李義山雜纂

犬 枕

羞 不 出 (恥ぢて人前に出られぬもの)

新婦失礼 (花嫁の粗相)

尼姑懷孕 (尼のにんしん)

相撲人面腫 (相撲取が顔をはらす)

富貴人乍貧 (金持が急に貧乏になつた折)

処子犯物識 (問題を起したきむすめ)

重孝醉酒 (重い喪中酔つぱらふ)

因に枕草子「恥しき物」では、「男の心の中、いさとき夜居の僧、みそか盗人云々」と泌々とした人生觀照の筆を進めるのである。

此の李義山雜纂、犬枕両者に影響關係を辿る事は出来ない。枕草子と李義山雜纂とは形態的近似をもち、(——精神内容の相違は前号で述べた)、犬枕は枕草子の影響作品にして、形態的に枕草子の(B)式を忠実に踏襲した事、及び、犬枕が精神内容において枕

草子とは相違して来たその相違点が、義山雜纂と枕草子との精神内容の相違点と殆ど重ると言ふ事、この二件の故に両者が非常に似てゐるといふ結果になつたのであり、それは両者がともに男性作家の手になるといふ事に一半の理由がある様に思はれる。

以上は、徒然草と言ひ、犬枕——（慶長の犬枕と別本犬枕の二系統の本がある由杉浦氏が指摘されたが筆者は前掲の翻刻を見たのみである。しかし此処で論ずる点に關しては両本とも同類とみてさしつかへないのではあるまいか）と言ひ、いはゞ隨筆文芸としての枕草子の系流をうけつゞ正統の作品であるとは既に世上の常識であらう。しかし乍ら、形態様式からは、それ／＼（C）式或は（B）のみの踏襲であり、精神内容に到つては、徒然草の世界も、犬枕のそれも、枕草子とはかなり相違して来てをり、前者は枕草子の自然觀、人間觀を中世的觀照において深め、後者は、義山雜纂に近く卑俗化してゐるのである。

### （三）

それでは、枕草子の世界がより正統的に受け継がれたもの、それは他に求められないであらうか。筆者はそれを誹諧の世界に見出せるのではないかと思ふのである。

白鶴堂琴風の撰集、誹諧瓜作は、

誹諧瓜作序（元祿辛未季夏）

夫人之飽食煖衣逸居而無事者聖賢惡其莫用心而不能共入君子之道矣：我邦自近古以來誹諧之連歌大行乎士庶矣：頃日撰二集号誹諧瓜作命名之意蓋取諸古歌而：其詠題則以枕雙紙條件為品彙

嗚呼其用心之勤也：  
と言ふ序をもち、

春は曙、こと／＼なる物 山は 峯は 原は 淵は 海は 渡  
しは 美さ／＼きは 家は すすまじき物 たゆまるゝ物 人にあ  
なつらるゝ物 にくき物 心時めく物 過にし方恋しき物 心ゆ  
く物 木の花は 池は 木は鳥は あてなる物 虫は につけなき  
物 川は はしは 里は 草は 集は 歌の題は 草の花は  
覺束なき物 たとしへなき物 ありかたき物 あしきなき物  
いとしけなき物 心よけなる物 とり当る物 物の哀れ しらせ  
顔なる物 目出度物 なまめかしき物 ねたき物 片はらいたき  
物 浅間敷物 口おしき物 はるか成物 關は 森は 湯は 帶  
より異に聞ゆる物 絵に書て踊物 書増りする物 哀れなる物  
心つきなき物 秋は夕暮 わひしけに見ゆる物 あつげに見ゆる  
物 はつかしき物 無徳なる物 はしたなき物 つれ／＼なる物  
取所なき物 おそろしき物 清しと見ゆる物 きたなけ成物  
いやしけ成物 むねつふるゝ物 美しき物 人はへする物 名お  
そろしき物 見るに異なる事なき物の文字に書きこと／＼敷物  
むつかしけ成物 くるしけ成物 とくゆかしき物 心もとなき物  
むかし覺へて不用成物 たのもしけなき物 近くて遠き物 遠  
くてちかき物 井は したり顔なる物 風は 嶋は 浜は 浦は  
寺は 経は 文は 物語は 野は だらには ときやうは夕暮  
遊ひは 舞は 引物は しらへは 笛は 見る物は 大きにて  
よき物 短くて有ぬへき物 むまやは 岡は やしろは 降物は  
日は 月は 星は 雲は さわかしき物 ないかしろ成物 さ

かしき物 法師は 女は 宮つかへは たゞ過にすくる物 たの  
もしき物 嬉しき物 たふとき物 歌は 狩衣は ひとへは わ  
ろき物 下かさ年は 扇は 神は 崎は 見習する物 うちとけ  
ましき物 唐衣は 紋は 病は 言にくき物 見苦しき物 (俳  
諧・文庫・珍本集による)

右の題目以外には七例の例外あるのみ。

○印は枕草子にあるもの。

次弟も枕草子(雑纂系)の章段の順序に大體従つてゐる。しかも、末尾に

誰か云枕草紙は此道の宝なりと亦大まぐらもおかし尤そうしは  
波枕の文字のひとつかたを残しけるとなりまぐらのひとつかたは尤  
にして尤にはあらず云々 今其枕の屑を拾ひ集て其誤に上塗を  
なし 只友人なりもならずも嘲あふのみ云々

と記してゐるから、枕草子の影響作品である事は明瞭である。その  
の題目を通覧する時、それらは、枕草子の形態様式中、所謂物づ  
くしの凡て (A)式 (B)式 (C)式 を踏襲してゐる事が分るのであ  
る。只、誹諧であるから、右の題目のもとに、多いものでは、連  
句の歌仙、少いものは発句の一句、二句、三句、四句、五句、六  
句が収められてゐるのである。その精神内容に到つては、

美しき物

しら魚や黒き器に美しき

青柳や心の風の行次第

這ふ児の目に先かゝるすみれ哉

逐塵 調柳 琴風

病は

昼は猶腹病煩の暑さ哉

夏の夜は寝ぬに疝氣の発り愚

月は

宇治の月山も腫も流れけり

百八を撞余し暑夏の月

入る月のさはるか動くむら薄

わひしけに見ゆる物

住付ぬ旅の心ろや置炬燵

墨衣更ても同じ形かな

芭蕉 由水

と言つた風に、自然、及び人事の、色彩或は情感を、実に感覚的  
にも亦観照的にも巧に捕へえた句が多く、それらを前掲の題目に  
びたりと一致する様にアレンジして編纂してゐる。そして、そこ  
に醸される美こそは、枕草子の(A)式 (B)式 (C)式の形態様式をも  
つ章段がもつ美に甚だ近いものゝ様である。いさゝかの差違は、  
平安時代と徳川元祿の時代との相違による必然的な風物の移り  
かはりであつて、それによつて生起した生活感情、美意識の性格  
は同類であると考へられる。犬枕よりも誹諧瓜作の方が枕草子に  
より近いのである。犬枕の「をかしみ」は、李義山雜纂のそれに  
近い卑俗さに墮してゐるが、誹諧瓜作のもつ「をかし」は、「春  
は曙」の連句がもつ快い「軽み」に伴はれた垢ぬけのした「をか  
し」であつて、

いやしけなる物

ほふつきに娘の鬼齒あらは也

白流

はしたなき物

煤払に女房の力みられけり

古水

の如く、ほゝゑましい情感の域にある「をかし」であり、枕草子のそれに通ずるものである。

筆者は前に「枕草子における物づくしの章段」において、物づくし形態をとる枕草子に、附味の妙をもつ表現——『枕草子の物づくしは連句における物附、心附の段階のみでなく、うつり、ひびき、にほひ、と呼ばれる蕉風の高次の境地に類するもの、又これと違つた味ひ、もつと近代的な感覚の附味まで出してゐると観る事が出来る様である』——の存在を例証したのであるが、枕草子に対し精神内容の近似、形態様式の忠実な承継と言ふ関係にある誹諧瓜作が、「誰か云枕草紙は此道の宝也」と明言してゐる「此道」とは、誹諧道を指すと考へられるのである。而もそれは、一俳人琴風が『枕草紙は誹諧道の宝也』といふ意識から、偶然、枕草子の影響作品たる誹諧瓜作を編纂した、といふ事にとゞまらない様である。

同じく、元禄十五年正月に京の書林井筒屋庄兵衛上梓にかゝる、筑前の知方の撰集、「はつたより」（初便）、が又枕草子の影響作品である。集中「清女が文にならひて」とある上に、

花は

さくら、梅、つはき 山吹 橘のひかしおもはれて（この項に38句）

鳥は

うくひす 雲雀 野鷲 郭公 わたり鳥 鶉 水鳥（この項に

24句）

月は

おほろ夜しくものはなしとよみたる秋の日は更なり よのつねのおかし 後の月 （10句）

雪は 名残の雪 初ゆき 常のも月の夜は猶てたし 霜霰又おかし （20句）

木は

柳一葉はなをもみち落葉のたくひ折にふれてあはれならざるはなし （13句）

木の実は

とん栗 梅もとき

（4句）

草は

青草 秋の野は薄にこそはときくにつぎ／＼しけれと冬枯の野等に見るこそ猶さう／＼しけた （9句）

風は

あきかせ暮風はたなつものをそこなひ家居をやふるものなれと朝のけしき旅なるそらは猶あはれなり木からし （6句）

雨は

さみたれ 夕立 しくれ

（9句）

けたものは

涅槃に出あはぬものなから恋するといふに猫さえ哀なり春の鹿の白寒けにむつけたるか妻乞かねてひいとなく秋の尾声それも是もあつめてかなし （11句）

虫は



なつむしのくるしけに燃わたりたる蚊のにくまれなからものま  
なひする人を寝せぬとこありておかしきりくすの新枕する人  
により添ふこそうへなきみやひなれ  
草の花は  
(16句)

けしの花の馬頭に見るとすしたるからうたになつかしく蓮の茂  
叔をよはし杜若かほよ花とは誰かすさひ出しやとゆかし晝良の  
くるはする夏野のくもりをみなへし  
嘉辰靈宵は  
(14句)

人の日 籬の日 あやめの日 七夕まつり 菊の日

神佛のわさは

祭加茂は更なり里のも魂まつり山伏の峯入春まつりは酢賣も蛸  
きておかし 十夜親鸞の忌御命講にをのか佛尊とかる はちた  
き  
(9句)

衣服は

なつ衣 かみ子 頭巾

一字の題は

農事は

麦刈そむるより早苗收穫みつきよそひすへて民種の勞周公のは  
しめにし給ふときくにあはれ也  
(8句)

四序の寒暑は

三伏のあつきに水の粉を賞して涼をまねくほとこそあれや團  
扇の籠もおとろへ夜寒を佗冬立あしたに炬ひらき冬かまへすへ  
て此すしの命也  
(26句)

聳ものは

かすみののとらしくいな妻は誰かちきりての名におへらんとい  
といふかし  
(6句)

四時の終は

春のくれ秋は腸をたつとすしたるからうたやまとのふしく冬  
はとしのおはりとしてよの中の立舞へるに松風なれし人の眼もし  
らみかちなるを又立かへる初空のつやくしく海も山も笑ひか  
けたるけしきこそきのふにはかはりて人のよのありさまはおも  
しろけれ  
(9句) (蕉門珍書百種より)

と言つた、枕草子の短い章段(形態的様式からは(A)式(C)式の  
踏襲)に匹敵する様な文章を序としてもち、それく似つかはし  
い句が集められてゐる。精神内容は、序になつた上掲の短い文章  
が何よりも強力に物語る様に、枕草子の世界の承継である。

又、芭蕉は鹿島紀行の中で「…月の光。雨の音。たゞあはれ  
なる氣しきのみ。むねにみちて。いふべき言の葉もなし。はる  
く」と月見に来たる。かゝるなきこそほるなきわざなれど。かの何  
がしの女すら。時鳥の歌えよまでかへりわづらひしも。我ために  
はよき荷担の人ならむかし。」(藤井紫影氏、校註風)と句作に際し  
て苦吟の折に、同じく苦吟の清少納言を枕草子によつて親しく想  
ひ浮べてゐる。且、「何がしの女すら」には先輩に対する尊敬と  
親愛の情がこめられてゐるのを看取すべきである。

古すだれ 芭蕉の五十回忌追善として巽齋湖十が撰(類原退藏  
の研)芭蕉の逸話より)氏俳諧史

の中に「簾の説」がある。それに

貞享の頃かとよ、遊行上人賦国法橋昌純はしめたれかれ一座連歌興行の後、俳諧の一卷なりて桃青の判乞れけるにその巻の中に簾といふ文字を芦と書れ侍る……翁芦かと添書ありしを云々香炉峯の雪と口すさひたまひしに簾を捲しためしもあり云々雪見賦癩乙子（支考）にも、

たとへ香炉峯に簾を捲たるをんなも云々

と記してゐる。即ち、前述の如何にも連歌的、或は漢和聯句的動作——（b）香炉峯の雪はいかならむ——（c）すだれをまく動作——を、枕草子を通して清少納言を、俳人達は屢々思ひ起すのである。それは何故であらうか。中宮のいはゞ前句的（b）に対し、間髪をいれずに脇句的（c）を清少納言が動作しえた——（動作が句となるのは今一步である。蘆山雨夜草庵中を「草の庵を誰か尋ねん」と翻譯して、蘭省花時錦帳下に巧につづけた清少納言の此の（b）は、連俳史家から漢和聯句の祖といはれるのであるから）、その機智を賞しそれに共鳴するものが俳人の胸裏にあつたためである。

#### （四） 結 び

前に、物づくし形態をもつ枕草子を主として（A）式（B）式（C）式章段群を対象として、その連句への近似を述べたのであるが、（一）においては、枕草子の事件を叙するもの、——結局、それも物づくし形態の変形D式、である事は前に論じた——D式の性格が、連歌、及び漢和聯句、或はそれに類する性格のものである事を述

べ、ついで、（二）において、世上、枕草子の系流の代表と目される徒然草、明瞭に枕草子の影響作品である犬枕等が、実は形態様式の上からも、枕草子の（A）式（B）式（C）式の一部を承継するのみである事、精神内容からも、かなりのずれが認められる事を証し、（徒然草の場合は、常識となつてゐるので論証を略し、結論のみを記した）——（三）において、俳諧の分野に、枕草子を「道の宝」と明言し、「清女の文にならひて」句集を撰する俳人達の作品集に、形態様式の上からも、亦、精神内容の上からも、非常な枕草子への親炙、近似を見出したのであつた。（それが蕉門の俳人達であり、「うつり、にほひ、ひゞき」を尙ふ彼等が、その附味に非常に似た、物づくし章段のいはゞ附味の妙を得てゐる枕草子に親炙する事は意味ある事に相違ない。只小稿ではその問題はまだふれないでおく。）此処において、枕草子自体に連俳的性格を（従来の非常に消極的な考に対し）相当積極的に認め、その形態様式並に精神内容を、かりに引きくるめて、枕草子の文芸性と名づけるならば、枕草子の文芸性は、所謂隨筆ものへ流れると同時に、むしろ、正統的に、連俳の世界に流れて行つたものではあるまいか。といふ事に関して、他日詳かに論証するに先だち、今は極めて梗概的に論じた次第である。

因に、犬枕、誹諧瓜作については、九州大学の杉浦正一郎先生に御示教を仰いだ。厚く御礼申しあげる。此の小稿を読まれるに當つては文藝と思想一号拙稿「枕草子における物づくし形態」並に筆者訳、義山雜纂通釈を併せ読まれる事をお願いする。